

## 意味の変化と表現価値

「おろかな」とか「ばかげた」といった意味をあらはすことは英語にもすくなくないが、そのうちでもよくつかはれることのひとつに *stilt* がある。この語はドイツ語の *stolz* と同源である。現代語どうしの比較によつてだけでも、これら二語の形態をあひだに法則的な音韻の対応をもとめうるであらうことは、つまり、語源的な関係がそこにあるであらうとほしは、すこし類例をあつめればすいてみえてくるが、そんなまはりみちをとらなくとも、もし古形を援引するならば、古代英語のかたちは、もは

や、ドイツ語のかたちと、そつくりおなじなのである。そして、そこまでさかのばれば、意味の面でも、そのあらはすところは、いまの「ばかな」ではなしに、ドイツ語ではいまでもさうであるところの、「幸福な」であつたのである。「幸福な」が「ばかな」に、論理はともあれ、心理的に、すりかはりうるのは、げにも *Ignorance is bliss* (もの知らぬこそさいはひなれ) だからである。

意味の変化の歴史は、こまかいところになると、その語をさへてゐる社会および文化やそれに対応する時代の意識や、また伝統的な心的傾向やの個性的な特徴にてらしてこれを具体的にとらへなければ、真に歴史の名にあたひするものにはなりがたいとみられるけれども、他面、おほまかにいへば、変化の契機には、人間の心理について共通なものも、また、しばしばみいだされうるであらう。さういふおほまかな視野のわくにすゑていへば、日本語の「おめでたい」もまた「ばかな」の意味になりうる、さういふ方向が当然のことながら、じつは、おめでたいのなかに、はじめからちやんと可能性としてやどつてゐたからこそ、たまたま、その可能性があるかたちで実現しえたともいひうる。しかしながら、そのやうな可能性の正体やあたらしい意味の歴史的発生の問題としてでなく、一往確立されたところの慣用の問題としてみるときは、英語でつかはれるばあひの *stilt* と日本語でつかはれるばあひの「おめでたい」とでは価値がちがふ。すなほにうけとればなぜに祝福さるべきなのか当惑せられる、なにもおめでたくなどない意味において、つまり、そのやうな、価値を顛倒した意

味において「おめでたい」の使用されるばあひには、この語をこのやうな使用のしかたで使用しようとする意図があらかじめはなし手のころを支配して語の選択がそこではふつうのばあひよりも複雑な心理でおこなはれるものと考へられるのである。なぜなら、はなし手は、じぶんの内面の《意識としての表現》のうちにはあらはれる意味形態（言語的に分節されてゐるところの意味の単位、ソスニールの術語 *signifie* をかりるならば、これを《形式》としてみたばあひのある統一、具体的にいへば、意識のなかで《あの男はばかだ》とのごとく考へたばあひの意識の表現の契機《のべか》、これを、このこゝでいふところの《形態》のその《表現》にはそくはないところの、しかし慣用的表現といふ面ではすでに社会に流通してゐるところの、さういふ性格をもつた《語》（すなはち「おめでたい」にわざ／＼翻譯するてまをとるからである。視野をかへて、知的な意味とか情的な意味とかいふことばをつかふならば——、これらのことばそのものの概念規定なり定義なりが厳密にはすぐにまた問題になりうるが、まあ、おぼさつばにいへば——、「おめでたい」といふこの語の知的な意味、すなはち、その知的な意味と考へべき意味として抽象しうべきところのその意味は、あくまでも *signifié* といふ意味ではない。それなのに、その「おめでたい」を *signifié* の意味につかふのであるから、そこには、当然、矛盾の意識がともなつてくる。そして、それが、語に感情のくまどりをほどこす。ある意味では、「おめでたい」の生命は、この感情のくまどりにあるといひうる、わざ／＼「おめでたい」といふ語をつかふのは、表現に感情のくまど

りをほどこすことをねらつてのことであるわけだから。つまり、慣用として確立されてゐる点では、いはば、手ずれのした、しかしながら、それゆゑにまた、たれにもすぐ誤解なくうつたへる効果をもつた、「おめでたい」は、さういふ皮肉のことばなのである。

民謡は、その作者が不明であつてこそ、真に民謡なのではあるが、その発生のいちばんのもともまでさかのほれば、たれかひとりのひとがあるかたちでそれをうたひはじめたにはちがひないとおなじ意味で、「おめでたい」のばあひにも、いちばんはじめには、たれか、他のひとびとの期待しない個人的なつかひかたで、たゞし、それが模倣される程度に適切なつかひかたで、つかひはじめたものであるにちがひない。しかしながら、社会のはからみれば、いひかへれば、うけとり手といふ全体のがはからみれば、みぎにいふやうなある特定の局面ないしは文脈に対するあるかたちの適用を恒常化の方向へもつてゆくには、そのかたちの保存とあたらしい維持とのために、そのかたちとそれによつて言及されるものとのあひだの対応関係をそのかたちのあらたな意味として抽象したかたちで確立しなければならぬ。そして、それには、音韻形態および意味形態の両面にわたつて、かたちのうへでは、いづれも在来のまゝなる語が、そのなかにもられることの期待しがたいことから、（意味内容）をもるためにわざとつかはれるといつた、さういふ用法が慣用の型として、まづ社会に流通をみなければならぬ。意味変化の歴史については、あひれがたい二つの知的な意味のあひだの推移を、その過渡のすがたに

いて、いはゆる情的な意味が往々に説明してくれるであらう。もとより、じつさいの問題となると、過去におけるある語の《情的な意味》をつぎとめることは、みかたによれば、ほとんど不可能ともいへるやつかないしごとであるが、しかし、かゝる意味の再建に困難がともなふことと《情的な意味》のいはゞ沈澱がやがてあたらしい《知的な意味》に変質するといふことばの歴史のある図式を設けてみることは、これまた問題が別である。意味変化の契機と過程とを説くに、なんらかのかたちで、この図式を採用しうべき実例は、じじつ、すくなくない。

さきに、わたくしは、《女郎考》なる一文をものした。そこで、「女郎」といふ字づらで書かれる「ジョロー」といふ語のこのかたちが語源的にいふと「上臈」にさかのぼるむねを説いた。そのさい意味の変化に対してある意味では決定的なかたちで参与したであらう表現価値の問題は無視してはなしをすゝめるとことわつて、それで、はなしをすゝめた。語源的にふたつのかたちをつなげるにあたつては、そこまで筆をおよぼすことは、かならずしもいらないと考へたからである。そのうへ、だれがどのやうな局面においてけいせいをはじめて上臈とよんだかは、すでにそのやうなことのおこつた瞬間からわすれさられてしまつたことであるから。しかし、「上臈」がけいせいをあらはすことばとしてつかはれはじめたとき、つまり、上臈ではない女を「上臈」とよびはじめたところには、それは、ゆたかな表現価値をおびたことば（俗語）としてこのんで口へのぼされたことであらう。このんでそれを口にした人間そのものは、具体的にはひとりびとりの個人には

かならないが、そのやうなこのみを生んだものは、あるいは、ささへたものは、社会である。前稿では、その社会の面から語の成立の可能性をとらへてみたのである。